

2022年10月6日

## 10月会長定例記者会見

### 発表項目① FIFA ワールドカップ カタール 2022

(前田会長)はじめに開幕まで1か月余りとなったサッカーFIFA ワールドカップ、カタール大会についてご説明します。NHKは今回、日本の初戦や決勝戦を含む21試合を総合テレビとBS4Kで生中継し、NHKプラスでも同時生配信します。この大会は、BS4Kの本放送が始まってから初めてのワールドカップとなります。4Kテレビをお持ちでも普段なかなか4K映像に触れる機会がないという方もいらっしゃると思います。ぜひこの機会に、4Kで世界最高レベルのサッカーを堪能していただきたいと考えています。また国内最大級のスクリーンを使って、4Kと一緒に観戦していただくイベントも実施する予定です。詳しくは担当から説明します。

(担当者)総合テレビでは全64試合のうち21試合を中継でお伝えします。11月23日午後10時キックオフの日本の初戦、ドイツ戦は、1次リーグ突破を目指し、世界の強豪とぶつかる大変注目度の高い試合となっています。総合テレビで放送する21試合は、すべてBS4Kで同時放送し、NHKプラスでも同時配信します。またBS1では、21試合を見やすい時間帯に中継録画でお伝えします。NHKニュースウェブにも特設サイトを作って、試合の途中経過、結果などをお伝えします。なお、大会直前の17日に行われるカナダとの強化試合も、総合テレビで放送し、NHKプラスでも配信します。

11月23日の日本の初戦で実施する4Kパブリックビューイングでは来場された方々に国内最大級のスクリーンを使って、試合を4Kでご覧いただく予定です。

続いては、NHKが、新しく制作したサッカーテーマについてです。

担当したのは人気ロックバンド King Gnu さんです。10月16日のサッカー天皇杯決勝の放送の中で曲全体を発表します。こちらからのご報告は以上です。

(記者)衛星波の削減を予定する中、4Kでワールドカップを放映することだが、その意味やBSの戦略は？

(会長)現在のBS1、BSプレミアムとBS4Kの3波は2023年度

中に再編し、ハイビジョン画質の衛星波と 4K 画質の衛星波の 2 波になります。NHK の衛星放送を支える新しい 4K の波が視聴者の皆様にとって、今まで以上に魅力的なチャンネルとなるよう、4K の長所を最大限生かしたコンテンツを制作、提供していきたいと思っております。そういう意味で、今回多くの方に 4K の魅力に触れてもらえるような機会があればと思っています

(記者)今回のサッカーテーマソングに King Gnu さんを起用した狙いや理由、もしくは期待することなどは？

(担当者)若者に人気があるグループだということを念頭に、スポーツ中継や音楽番組のプロデューサーなどと検討して選びました。ワールドカップだけではなく、サッカー全体の盛り上げにつながればと考えています。

(記者)この曲をサッカーテーマとする期間は何年までか？

(担当者)決まっています。

(記者)関連番組を含めた総放送時間は？

(担当者)総合テレビでは 67 時間 35 分、BS1 では 40 時間 20 分、ラジオ第 1 では 10 時間を予定しています。ただし、現時点では録画の再放送、再生放送などの計画が確定していないため、その時間は含まれていません。また決勝トーナメントの延長戦などの時間も入っていません。

(記者)前回と比べての増減は？

(担当者)前回までは放送体制の枠組みが JC でしたので、それと比較すると減っています。

(記者)NHK のパブリックビューイングといえば、今まで 8K が前面に出ていたと思うが、今回 4K なのは、国際映像で 8K がいないからか？

(担当者)NHK の中で限られた放送資源をどう活用するかという観点も踏まえてのことです。

(記者)今後 BS が 2K・4K・8K の 3 波になるということで、今回 4K を重視したのか？

(会長)今、4K の受信機は 1500 万台ぐらいだと思います。かなり普及してきましたが、8K はそのレベルで普及していません。8K であれば、もちろん高精細にできますが、4K を本格的に普及させる時期に来ていると私は思いますので、そちらから入るということです。4K で十分高精細に映せます。8K に越したことはないですが、制作コストがものすごくかかります。そういう意味では、今回初めて 4K で本格的にやるということに力を置いたということです。

## 発表項目② 紅白歌合戦について

(前田会長)第73回の紅白歌合戦について、ご説明します。73回目となる今年の紅白歌合戦は、2年ぶりにNHKホールをメイン会場にお届けします。ホームグラウンドに戻って、視聴者の皆様の心に残る紅白をお届けしたいと考えています。放送時間は午後7時20分から11時45分まで、総合テレビ、BS4K、BS8K、ラジオ第1で放送します。司会者や出場者などは、決まり次第お知らせいたします。今年は視聴者の皆様にNHKホールにご来場いただいて開催する予定です。観覧についてはこの後、午後4時から観覧募集を始めます。新型コロナウイルスの感染防止策を徹底した上で、多くのお客様をお迎えしたいと考えています。2023年が明るい年となることを願いながら、希望をつなぎ、1年を締めくくるのにふさわしい紅白にしたいと思っています。

## 発表項目③ PBI・国際公共放送会議(PBI)の東京開催について

(前田会長)PBI・国際公共放送会議は、およそ30年前に設立されました。毎年世界のおよそ50の公共メディアが、それぞれの取り組みや経験から学ぶことを目的に参加します。ことしは13年ぶりにNHKがホストを務めます。会議では、ロシアによるウクライナ侵攻が長引く中、「信頼される放送、報道とは」というテーマで意見を交わします。また「最新技術を活用したユニバーサルサービス」や、「環境経営」など、世界の公共メディアが直面する共通の課題ごとに議論し、NHKの取り組みも紹介します。世界初の公共放送のイギリス・BBCは、ことし放送開始からちょうど100年になります。NHKも3年後にラジオ放送が始まって100年を迎えます。メディア環境が大きく変化する中で、公共メディアの役割やサービスのあり方について、議論を深めたいと考えています。

(担当者)今年のPBIは来月16日から3日間、東京で開催します。テーマは「いま、なぜ“公共”か:これまでの100年、そしてこれから」です。参加者は各公共メディアの経営層です。初日の開会式は、東京国立博物館で行います。NHKと東京国立博物館は共同で、8Kや3DCGの技術などを活用し、国宝や重要文化財を記録する研究を行っています。会場でその成果の一部を体感していただき、公共メディアの新たな取り組みとして紹介したいと考えています。2日目は、イギリス・BBCのティム・デイビー会長が基調講演を行います。「BBC100年とこれから」をテーマに、公共メディアは今、何をすべきかお話し頂きます。その後はテーマごとのセッションが開かれます。ウクライナ公共放送の報道局

長がオンラインで参加する、「紛争報道と公共メディア」をテーマにしたパネルディスカッションなどが予定されています。PBI は従来から原則、非公開の会議ですが、初日のイベントや BBC 会長の基調講演はメディアの皆様にも公開する方向で PBI の事務局と協議しています。

(記者)公共放送を巡っては、BBC が受信許可料の見直しの動きなど、世界的にさまざまな議論があるが、どう見ているか？

(前田会長)放送と通信の融合が進む中、イギリス、フランスを含めて各国の公共放送の財源のあり方については、さまざまな議論が各国で行われています。その歴史的な経緯に応じて、各国が独自に決めるものだとは承知しています。議論の経過や今後の対応について、関心を持って見ていきたいと思えます。

(記者)今の NHK の現状も踏まえ、意見交換したいことはあるか。

(前田会長)公共放送とは何かという原点については、いろいろディスカッションしてみたいと思えます。NHK もウクライナの公共放送をずっと支援した経緯があります。今これを見ますと、やはり公共放送とは何かというのを、この短い間にこれほど経験した公共放送はないですよ。我々から見てもすごく勉強になることですし、やはり原点って何なのだろうというところは常に考えなければならぬと思っています。公共放送は、BBC もそうですが、放送だけではなく、通信と融合が進んでいますので、放送だけでなく、公共放送とは何かという原点部分は、常に議論したほうがいいと思えます。伝達手段は変わりますが、公共放送の意義というのは、それほど変わるわけではないと思えますので、そういうことについて、それぞれの責任者の方とお話できれば、私も参考になります。

(記者)現時点の値下げの検討状況について

(前田会長)受信料値下げについては、中期経営計画における NHK の抜本的な改革とスリム化、強靱化の結果として最後は視聴者の方の受信料を下げるということでお返しするしか方法がないものですから、そういう形でお返しをしたいと考えています。いろんな改革を今やっている最中ですが、いわゆる三位一体改革で放送法改正もやっていただき、恒久的にこれでいけるというところがある程度見えてきましたので、これを固めた上で経営委員会にご承認いただければと思っています。

(記者)足元ではインフレや世界情勢の変化など不確定な状況があるが、

見通しは、どうか？

(前田会長)物価の高騰の影響は間違いなくあると思いますが、そういう影響を織り込んだ上で、受信料を恒久的に下げても大丈夫というところまでシミュレーションできた段階で、しっかりと発表させていただきたいと思います。これはお約束したことで、視聴者の皆さんにお返しする方法はこれしかないわけですから、決めたことをしっかりとやっていきたいと思っています。

(記者)衛星契約の受信料を2023年10月にも1割程度値下げするという報道があるが？

(前田会長)中期経営計画を作った時に衛星契約を中心に1割程度下げたいということをしてすでに1回発表していますが、基本的な考え方はそれほど変わっていません。なぜ衛星波なのかということですが、今の価格体系で、衛星波と地上波の差が倍近くあり、割高だという声をずっといただいています。もう1つは、衛星放送の契約率が今のところ50%ちょっとですが、なかなか進んでいないのは、やっぱり値段の問題もあると思いますので、そちらを優先して下げさせていただきたいというのが最初の理由です。そちらを1回しっかりと下げて、最終的には、総合受信料のほうに移行できれば、もっと料金体系がすっきりすると考えています。総合受信料の方に移行できれば、シンプル化もするし、受信料の値下げで還元するときも還元しやすくなります。前回値下げした時は地上と衛星の両方一緒に値下げしたので、下げ幅も非常に少なく、ほとんど実感がなかったと思うのですが、これはあまりよくないので、しっかりと利益の実感が出るような形でお返ししたいなと思っています。

(記者)値下げの時期は来年10月にもということの間違いないか？

(前田会長)今の受信料の制度が非常に複雑なので、発表してからそれぐらいの時間を取っておかないと、値下げできません。まだ決めていくわけではありませんが、それくらいかかる可能性があります。

(記者)来年10月に向けて調整に入っているということか？

(前田会長)経営委員会で全部承認いただければ、そういう準備をしたいということです。

(記者)それは来週の経営委員会で計画の修正案を出すという方針か。

(前田会長)そのつもりです。

(記者)今回は衛星契約で1割値下げし、地上波については据え置きということか？

(前田会長)まだそこは決めていません。

(記者)地上波の据え置きは決めていないのか？

(前田会長)はい。まだちょっと時間がありますので。

(記者)総務省の公共放送ワーキンググループで議論が始まったが、NHK がインターネットで果たすべき役割について、どう考えているか？

(前田会長)伝達手段がインターネットであろうとなんであろうと、公共放送の役割があると思っています。その基本スタンスは変わらないと思っていますので、その中でぜひ議論していただきたいと思っています。私ども NHK も発言する機会がありますので、その場でこうやってほしいという願いもしたいと思っています。オープンに議論していますので、皆さんもご意見を言われたらいいのではないかと思います。

(記者)ネット受信料については？

(前田会長)現時点でネット受信料という発想は私どもにはありません。最終的に、こういうのはやっぱり視聴者の皆さんのご理解が得られるかどうかだと思います。こちらで勝手に決められる問題ではないということです。

(記者)紅白歌合戦の開始時間を午後 7 時 20 分とした狙いを。

(担当者)紅白歌合戦の放送開始時間につきましては、視聴者の関心も踏まえまして、総合的に判断させていただきました。

(記者)紅白歌合戦が、NHK ホールで有観客で開催されるのは 3 年ぶりになりますが、収容人数についてはどう考えているか？

(担当者)現在まだ決まっていません。演出などが決まってからになります。

(記者)観客の座席は 100%入れる方針か。

(担当者)新型コロナウイルスの感染状況と国や都のガイドラインも踏まえて決めていきたいと思っています。

(記者)今年も観覧募集の方法がウェブですが、前回往復はがきをやめて、何か混乱とかはなかったという理解でよいか？

(担当者)前年、ウェブによる応募を開始しましたが、特段混乱の声も聞いていません。今年も引き続きさせていただきたいと思っています。

(記者)長らく伝統として続いてきた「紅白」、紅組白組の分け方、男女で分けることに対して、違和感があるという声もネットでは見られる。そういった時代の変化にも対応をしようと、去年はテーマをカラフルとしつつ、紅組白組の分け方はそのままにしていたが、今年、現時点で紅

組白組の分け方についての考えは。

(前田会長)いろいろご意見をいただいています。「紅白」ということで定着していますので、ちょっとだけいじるのはすごく難しい。いろんなご意見をいただいて、なんとかしたいというのもあるのですが、やっぱり「歌合戦」というところが原点で、年越しの最後に1年を締めくくって元気に翌年を迎えたいというのが原点です。そこは失いたくないなという感じです。ですから、ジェンダーの問題だけの中に入れて、本来の「歌合戦」が飛んでいって本来の趣旨と外れてしまいます。そういう意味で、私は毎年いろいろ見直ししながら、一番いいスタイルでやってほしいと担当の方をお願いしているんです。毎年同じことをただマンネリみたいに繰り返すのではなくて、毎年毎年、感動を呼ぶようなものにしてほしいというのが私の願望です。

(記者)今のお話ですと、赤は女性、白は男性っていう対抗形式っていうこと、基本的な形式については今年も変わらずということか。

(前田会長)いや、分かりません。担当がそうじゃない方が良いと言うのだったら、それはそうします。もう少しお待ちください。

(記者)9月にBPOが昨年末放送のBS1スペシャルについて、重大な放送倫理違反と認定したが、どう受けとめているか？

(前田会長)私は、BPOのご指摘通り、重大な放送倫理違反があったと、本当にそう思っております。これは改める必要があると思います。報道の基本スタンスの研修、体でしっかりと覚えるという、そこがまず大原則だと思います。いろんな問題が指摘されていて、試写のやり方が悪いとか、いろいろありますが、トータルで見ますと基礎的なトレーニングが不足していたと言わざるを得ない。形だけの再発防止をしても直りませんので、ここは徹底的にやりたい。いろいろ処分をしましたが、生命線のところでもありますのでしっかりとやりたいと思います。本当に、関係者の方にご迷惑をおかけし、誠に申し訳ないと思っています。

(記者)意見書の中でただでさえ忙しい現場にさらなる負荷を強いるような再発防止策では抜け道が探られることになりかねない、繰り返されるのには、どこかに無理があるのではないかという指摘がある。個人の問題ではなく、組織の根本的な問題をついていると思ったが、特にこの点、組織全体としてどうしていくべきか。

(前田会長)今回こういうことを起こしたのはベテランの職員ですが、ベテランがなぜ、と感じると思います。そういう意味で、入口の研修から「報道とは何か」ということをしっかりとやる必要があります。例えば、

カメラマンだからカメラマンだけやればいいとか、そういうことじゃない。NHK はこれまで縦割りできているので、そういうことが起こる可能性があるわけです。そういう意味で、新しく採用した方を含めて全職種で入口の研修を 2 年間、すべてについて研修するというスタイルに変えました。ただ、それだけで大丈夫かとなるので、それぞれの階層でチェックする人を含めて改善する。体で覚えるというところまでもう 1 回やり変える必要があると思っています。BPO のご指摘はその通りだと思いますし、それを是正するために本気になってやらないと直りません。

(記者)先月、当時の首都圏放送センターに勤務していて亡くなった 40 代の男性職員が労災認定された。2013 年に佐戸未和さんが亡くなってから、いろいろな再発防止策を講じてきたと思うが、それが十分に機能しなかった、また起きてしまったっていうのは、何か根本的な原因があるのでないか。会長としてどのように分析し、受けとめているか。

(前田会長)職場によって、仕事のやり方や繁忙期が違いますので、総論でいくら言ってもなかなか是正されない面があります。勤務時間でアラームを出して、これ以上になったら強制的に休んでください、という制度を入れてやってきましたが、そうした外形基準からさらに 1 歩踏み込んで、職場の実態を一番よく知っている局長が、責任者としてそうしたことが起こらない職場に改善するようになっていく必要があります。それから仕事のやり方ももちろん変えなければいけないと思います。皆さんもマスコミの方々ですから、労働実態はそれほど変わらないと思いますけど、やっぱり心理的なストレスを含めてものすごく重いものがあります。労働時間だけじゃないと思います。やっぱり健康に仕事しないと続かないわけですから。要するに、「大変だ」ということを言える職場にするというのが原点だと思っています。そのために仕事のやり方も変えるし、上司はちゃんと部下の人が何をやっているのかよく見る。それが、本当の意味の「あたたかい職場」じゃないかと私は思います。ハードとソフト両方改善しないと、形だけやっても、なかなか直らないと私は思っています。

(記者)今回は渋谷労働基準監督署からの指導票に基づいて産業医面談の実態を報告しなければならない。10 月 7 日が締め切りとのことだが、現時点でどういう報告をするのか。



(担当者)まだ改善している途中でして、渋谷労基署への報告は、「こういった方向で検討しています、こういったことを取り組んでいます、最終的な報告はまた別途させていただきます」と、そういった内容になるかと思っています。

(記者)再発防止に関する施策を3か月以内に出すということだが、そういう取り組みをやっているという形でとりあえず報告するというとか。

(担当者)そういったことも含まれていますし、今すべての職場で討議をしている最中で11月末まで討議するので、その結果も集計して盛り込む必要があると考えています。

(記者)BPOの問題と今回の労災認定を含めて、9月13日の経営委員会議事録を見ると、前田会長が繰り返し、あたたかい組織作りということ述べているが、具体的にどういうことを考え、どういう方向性で組織作りをしようと考えているのか。

(前田会長)これはちょっと、私の個人的な考え方ですが、ある自動車メーカーの現場でご説明を聞いたのですが、その会社では、調子悪から休むと手を挙げた人を高く評価するという仕組みになっているのです。普通の会社は、這ってでも出てこい、調子が悪くても出てこい、頑張れ、といった精神論が多いのですが、むしろ出てこないことを評価すると。これはどういうことかといいますと、結局、無理して出ていって部品1個間違えますと、欠陥車ができてしまうわけですね。そうすると、全体のラインが止まってしまうわけです。かえって、その方が生産性は落ちるといふ哲学なのです。もう1つは、例えばネジ1個落としてしまったとかいろいろなミスがあるわけですが、そのメーカーはミスを犯した人が悪いということではなく、ひょっとしたら、つけ方の手順、もしくは装置が悪いのではないかということで、ラインの責任者がそこに行って検証することになっています。そこは、やっぱり品質ナンバーワンをずっと誇ってきた会社だなと思いました。NHKも番組を作っているという意味では同じです。それから、チームワークで作っているのも同じです。やっぱり、そういうことは言える雰囲気にならないと、みんな無理しますよね。物理的にじゃなくて、精神的に休む暇がないと、続きません。やっぱり、ストレスがかかるポストがあるわけですから、そういうのは、少しあたたかい目で見ないとね。非常にきつい仕事は、モラルが高いために、そういう事が起こり得るのですよね。それをしようがないなどと言っていたら永遠に改善しませんので、むしろちょっと変わ

った角度で「手を挙げやすい雰囲気にはできないのか」と、私は提案しているわけです。

(記者)第2四半期が終わり、まもなく業務報告や営業成績が発表になると思うが、訪問によらない営業を導入して当初の予定より受信料の見通しがかなり厳しくなっているのではないか？予定どおりの収入見込みが難しいと、値下げも含めた先の見通しにも大きく影響してくると思う。営業状況に今どういう問題があり、どうしようと考えているか？

(前田会長)営業のやり方を全面的に変えていますので、簡単には変わらないというのはご指摘の通りです。ただ、ここ2年間コロナがあり、もともとそんなに訪問できない状況でした。その中で、法人委託などを全部やめたので、その影響はもちろんありますが、それでもそんなに落ちてないというのは、ある意味で留まっているということです。この先は、何かをしたら支払率がボカンと上がるという施策はないので、いろいろなものを組み合わせてやっています。成果は一挙には出ないですが、着実に出るというのを選びました。本体の営業職員、子会社でやっているところを含めて、やり方を変えることについて、最初は戸惑いがありますが、逆に新しい仕事で訪問が必要な部分もあります。営業をやめたと言っているのではなく、やり方を変えようと言っていて、それについて現場の職員から「じゃあこうしよう」というのが具体的にいっぱい出ています。それが成果に直結するには、やっぱり時間がかかります。ただ、やり出したら、大きな組織ですので、あまり心配していません。そういう意味では、「受信料の値下げはやめたほうがいい」ということではないと思います。ただ、どうしても時間はかかります。営業のやり方をどう変えるのかという点について具体的なものがないと現場は方向性を見失いますので、私もその都度、「昔の通りやらなくても心配しなくていいよ。そこは納得してやってほしい」と言ってきました。ですから、そう心配はないと思います。営業は副会長が担当ですので、必要であれば副会長からコメントしてもらいます。

(正籬副会長)訪問による営業は、苦情がすごく多かったです。訪問によらないという形で、それは本当にかかなり低く抑えられています。巡回で訪問して契約していただいた方は離脱も多かったのですが、それも非常に抑えられています。あと、コンテンツの価値を感じて頂いて契約していただく方法もいくつか成果が出ています。これまで紙ベースだった契約の仕方をインターネットで手軽にできるようにしたり、いろ

んな公営企業と連携したりして、徐々に芽も出始めています。今、訪問員が急激に減っていますので、営業実績は簡単に上がるということにはなっていませんが、これまでの人海型とは違う形で、納得していただいております。価値を感じて頂いてお支払いいただくということで、幾つか形が見えてくるのもあります。会長がお話したように、簡単に結果が出るものではないですが、今、例えば 30 代 40 代の方も多く見て頂いているような番組も出てきました。そういうことも含めてリーチを広げていき、コンテンツの価値を感じて頂いて、視聴者リレーションも含めて契約していただく。そういうことに大きく舵を切っています。簡単にすぐ、成果が出るというものではありませんけれども、徐々に成功体験も出始めていますので、そうした事を地道に続けていくということが必要だと思っています。

(記者)新しい営業方法がすごく時間がかかりそうだという見通しがあると、当初 1 割ぐらい下げようと思っていた受信料の値下げが、少し慎重になるような状況に陥っていないか？

(前田会長)そこは心配ないと思います。本来的な営業のやり方に変えますので、営業職員の頭の中も、行動も変えてもらわなければなりません。視聴者にもそれをちゃんと訴えなければなりません。時間はかかりますが、かなりトレーニングもしてきましたし、いろいろなところと提携を始めましたので。一挙に投網で何かをやるというのではないですが、着実に上がると思っています。この 4 月から新しい体制になり、まだ 1 年経っていないわけです。ですから、もうちょっと見て頂ければ。僕はあまり心配してないです。NHK の職員は真面目な方が多いので、納得するまでなかなか行動が変わらないところがありますが、納得すれば徹底的にやります。やり方を 180 度変えましたので、体で覚えるのは大変ですよ。でも、納得してもらわないと結局前に進めませんので、若干急がば回れの部分がありますが、そこはご安心頂きたいと思っています。

(記者)9 月 30 日に終了した朝ドラ「ちむどんどん」の所感と、10 月 3 日からスタートした「舞いあがれ！」の期待は。

(会長)「ちむどんどん」を見て、最後どういう結末になるのか、ちょっと心配しましたが、最後はある意味、非常にハッピーな形で、男の子も、真面目になって本当によかったなど。また、沖縄のきれいな風景が映っていて、非常に良いドラマだったと思います。今度の新しいドラマは、また全然違った形で、夢に向かっていくというストーリーですから、期

待しています。

(以上)